
狂い桜

平杏維新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狂い桜

【Nコード】

N8659T

【作者名】

平杏維新

【あらすじ】

私こと瑞樹トウミのクラスメイト、釜石イリコには友達がいなくて、常に一人で桜の前で過ごしていた。それに対し、私はクラスの人気者で、常に友達と過ごしていた。正反対の私と彼女は交わることなく過ごしていた。しかし、ひょんなことから彼女と私は交わる事になってしまった……私と、彼女と、桜にまつわるお話

桜咲く季節（前書き）

どうも、本作品は部活で書いた短編小説を分割して連載小説にしたものです。

ぜひ、やさしい気持ちで見てください。

最後を書くためにだけ書きました。最後まで見てやってください。

桜咲く季節

私こと瑞樹トウミのクラスメイト、釜石イリコには友達が誰もいなくて、常に一人ぼっちだった。

別に容姿も悪くは無く、成績も優秀であったが、友達作りは出来ない子であった。

休み時間は常に本を読んでいて、昼休みになると中庭にある桜の木の前で一人で昼食を摂っていた。

まあ、友達がいらない子の典型的なパターンであろう。

それに比べ私は

容姿も良くはないし、成績はテストで常に赤点をキープする程の実力であったが、友達はたくさんいたほうだと思う。

休み時間は常に友達と話していたし、昼休みも友達と昼食を摂っていた。

自分で言うのも何だが私はクラスの中心的ポジションにいた。

私と彼女は一年、二年と同じクラスだった。しかし、正直、私は釜石イリコと仲良くなろうとは微塵も思っていなかった。

彼女と仲良くしているなどという姿を誰かに見られてしまったら私の評判が落ちてしまうと思ったからだ。

だから、私は彼女に積極的に関わろうとはしなかった。私の中では彼女は空気と同様であった。

彼女にとってもそうであろう。

私みたいな馬鹿でうるさい奴とは関わりたくもないと思っているだろう。

このように正反対でお互い関わる気さえ無い二人が交わったのは二年の頃だった。

二年のある時、授業で二人一組でレポートを作らなければならぬときがあった。

大体は仲が良い人とペアになるのだが、この教師はそれで余り者がでることが嫌らしい。

だから、くじ引きで決めることになった。その結果、私は釜石イリコとペアになってしまった。

ペアとの顔合わせの時の沈黙はとても辛かった。まあ、それでも宿題は宿題だし一人で適当に済まそうと思った。

しかし、そのレポートの内容が相当面倒で一人でやるのに無理を感じてきた。

彼女も同じことを考えていたのだろうか、レポート提出一週間前に初めて彼女と話した。

自慢だが、私はすぐ人と仲良くなれる能力を持っている。何故か分からないが誰とでも話せば仲良くなれる。

正直、彼女とは仲良くなれないだろうなと思っていたが、彼女として例外では無かった。

むしろ、彼女は思っていたよりも気さくで話しやすかった。

まあ、少し世間慣れしていないというか、他の人たちと価値観がずれているような感じはした。

しかし、クラスメイトと話せないほど恥ずかしがりやだとか逆にクラスメイトを見下していて話したくないとか、そんな風には全く見えなかった。

何故、そこまで友達ができないのか、友達がいないのか、私には全く分からなかった。

レポートを提出するまでの一週間で私は彼女のことを相当好きになっていった。

最初、言っていたように私は彼女と一緒にいて恥ずかしい思いをすることが嫌だった。

彼女という、変な噂を流されるのが嫌だった。しかし、今ではそんなことを思っていた昔の自分が馬鹿らしく思えた。

教室でも普通に彼女と話すようになった。そして、むしろ彼女のことを誤解している人たちの誤解を解いてあげたいと思った。

誤解を解いて、彼女も私たちと同じ輪に入れてあげたいと思った。

だって、あんなに面白い話をする彼女が一人ぼっちだなんてもったいないからだ。

でも、それはただの迷惑だったのかもしれないのだが。

彼女は私という友達ができても、休み時間、昼休みとやっていることは同じだった。

休み時間は本を読み、昼休みは私が弁当に誘っても、断って桜の木の下で一人で弁当を食べていた。

私は彼女に避けられているのかもしれない。

でも、私が彼女に話しかけると彼女は笑顔で返してくれた。

別にすぐ話を切り上げようとしているわけでも無いし、嫌われているわけではないと思うけどやはり気になってしまう。

そんな話を周りの友達にしても「彼女だからしょうがない」などと言われるのが眼に見えているのでこの思いを誰かに打ち明けることは無かった。

桜知る季節

奮闘し始めてからしばらく経った。

彼女の状況は相変わらず変わらなかった。

桜が散っても昼休みの度に、中庭に出て一人で昼食を摂っていた。そろそろ限界が来ていた私は思い切って彼女にその桜について聞くことにした。

「ねえ、なんでこの桜の前でずっと昼ご飯を食べているの？」

「うーん、思い出の桜だから一緒にいたいだよ。」

「思い出？でも、入学した頃からあの木の下でずっと昼ご飯を食べていなかったっけか？」

彼女は知ってたんだと恥ずかしそうに頬をかくと続けて言った。

「いや、直接的な私の思い出じゃないんだよね。」

彼女はそう言うで一瞬、寂しそうな顔をしたが、すぐに隠した。

「あの木って誰が植えた木か知ってる？」

「いや、知らないけれど…。」

「実はあれって私のお母さんたちが植えた桜なの。私のお母さん、この学校の同窓会役員だったから。」

少し話の展開が予想でき始めた。

彼女に辛い思いをさせてしまうだろうが、私は彼女に話を続けてもらった。

「それが何の思い出になるの？」

酷く冷たい言い方になってしまった。

彼女はまた寂しい顔をしたが、今度はそれを隠そうとはしなかった。でも、優しくして強い彼女は続けてくれた。

「私はお母さんが好きだったの。でも、私の大好きなお母さんは死んでしまった。

その桜を植えた後、家に帰ってくる途中で、事故にあってしまっただけね。

突然すぎると思わない？ 最期に会話した内容なんて覚えていない、家族に私に自分の最期を予期して残してくれたものなんて何も無かったの。

でも…この桜はお母さんが最後の最期に残してくれたもの、お母さんの生きた証なの。」

支離滅裂すぎてごめんなさいと言うと、彼女は教室を出て行ってしまった。

その日、彼女は教室に戻ってくることは無かった。

それ以降、私は昼休みに彼女を無理に教室に留めようとはしなかった。

桜散る季節

それからしばらく経った。夏が過ぎ、秋が来た。

「ええ！あの木が切られちゃうの！」

私は友達からそんな事実を聞いた。

どうやら私たちが進級する間に中庭で大きな工事を行うらしい。

その工事のために中庭に生えているあの木を切る必要があるらしい。私はすぐにイリコに報告をした。それを聞くと普段は冷静な彼女が珍しく青い顔をした。

「あの木は中庭の隅のほうにあるはずよ、あの木を切る必要性はないわ！」

そう言って彼女は立ち上がった。

「どこに行くの。」

と私が聞くと、彼女は

「校長室。」

と一言だけ答えて駆け出した。

普段は地味なのに、こういうことになるのと彼女はとても積極的になるようだ。

私も付いていきたかったが、今から補習なのでそれは無理な話であった。

私が補習を終えて、靴箱に降りてくると落ち込んだ様子の彼女が私を待っていた。

彼女の表情を見る限り、桜の伐採の話はデマじゃあ無かったようだ。

イリコの話をもとめるとこうだった。

- ・中庭に廊下を作るため邪魔な桜の木を切るということ。

- ・彼女が桜の木を避けて工事をしてくれと言ったところ、

どうやら桜の木を切らないで廊下を作ると

理事長の銅像を壊さなくてはいけないので無理と言ったらしい。

彼女は校長に激しく異論を申し立てたが、

校長も理事長には逆らえないらしく首を縦に振ることは無かった。

「とんだ学校だね！」

私はそう言って道端に転がっていた石ころを蹴飛ばした。

「まあ、理事長が一番偉いんだし、しょうがないよ。」

とイリコは言っていたが表情はそんな風には見えなかった。

私はどうにかならないか考えた。

理事長に直接言っても頭の固そうな人に何を言っても通用しないだろう。

さらに考えた。こういう時に有効な行動は何だろうか。

「そうだ！署名だよ、署名！」

「署名？全校の過半数以上が必要なのよ。誰があんな花が散った木のために名前を書いてくれるの。」

確かにそうだった。誰があんな木のために署名してくれるのだろうか。

友達で数を増そうと思ったが、私はともかく彼女には友達と呼べる人がおそらく私しかないだろう。

私の友達だけじゃ到底過半数には至らない。

「うーん、でも、これしか方法は無いよね。」

これ以上、私には最善策は思い浮かばなかった。

彼女は諦めたような顔をして、もういいやと言って帰ってしまった。しかし、彼女は表面ではそんなことを言いつつも、内面は泣きたいくらい悔しいのであろう。

そんな彼女のために私はもうちょっと方法を考えてみることにした。

桜変わる季節

「とりあえず署名しか方法は無いと思うのよね。」

と一日考えた結果を彼女に伝えた。彼女はやっぱりか、と言って項垂れた。

「でもでも、どうにか署名してもらう方法なら考えたんだよ。」

「方法？どうやって？」

私は胸をはり、こう答えた。

「伝説を作るんだよ！『伝説の木の下で結ばれた者は永遠に幸せになれる』とか…。」

そうすれば木を切らないでって人も増えるんじゃない？」

彼女はポカーンとした表情をしていたが、少し考えて言った。

「それいいね。でも、どうやってそれまでに広めるのさ。工事もうすぐだよ。」

そこまでは考えてなかった。そんな即効性のある噂があるのだろうか。

「あの桜が狂い咲きをすれば…。」

「狂い咲き？なにそれ？」

珍しく彼女が私に質問をしてきた。彼女が知らなくて私が知っていることもあるんだな。

「狂い咲きっていうのは時期はずれに花が開花してしまうことだよ。狂い咲きすれば何か面白い伝説ができると思うんだけどな…」

「…狂い咲きの条件は？」

彼女が静かに冷たくまた聞いてきた。彼女の表情もどこまでも冷たく、そして固かった。

この表情の彼女は始めて見る、いや、一年前はずっとこの表情だったか。

私は彼女に少しおびえながらも答えた。

「うーん、台風が来たり虫が葉っぱを食べたりして木についている葉っぱが無くなると…狂い咲くって話だよ。」

「へえ…そう。」

そう言った彼女の目はやけに鋭かったのを覚えている。

その時の私は次の月曜日に見ることになる光景を予期する事など出来なかった。

桜終わる季節

月曜日、学校に来てみると、中庭に向かう廊下に人だかりが出来ているのが見えた。

その人だかりの中でかろうじてクラスメイト兼幼馴染を見つけることができた。

「なに、この人混み……。まるで人がゴミのようだよ。」

と挨拶代わりに声をかけると、

彼はなにそれ、つまらない、と言って目を細めた。

そして、話を続けた。

「あー、中庭に言ってみれば、わかるよ。見てみな。」

彼はそういうと、めんどくさそうにその場を離れていった。

付き合いの悪いやつ。。。。

人混みを潜り抜け、私はやっとの思いで中庭に辿り着く事ができた。

そして、必死に頭を上げるとそこにあったのは、

葉が全て無くなっている桜の木だった

あれをやったのはあんたか、とイリコに尋ねると彼女はそれを肯定した。

「全部、葉っぱを抜いたのにまだ咲かないのね。困っちゃうわ。」

と彼女は笑顔で言った。本当に彼女の行動力が怖い。

「あの桜が美しく咲く方法はないのかしら。」

と彼女が質問してきた。私を植物博士だと思っているのだろうか。

「流石にそこまで知らないな…。」

と言うと、彼女は明らかに不快な顔を向けてきた。

本当にこのことになると彼女は人が変わってしまうようだ。

苦し紛れに私は知っている噂を言った。

「あー、でも大切なものを埋めると想いを吸って成長するとかいう逸話ならあるよね。」

彼女は少し考えたが、別に興味なさそうにふーん、と言って聞き流したように見えた。

「でも、噂とかどうするの？」

と彼女に聞くと

「まあ、珍しいことが起こればそういう伝説を作りたがる人もいるでしょう。」

と答えた。それで彼女との会話は終わった。

それにしても、私は彼女のことを甘く見ていた。

彼女の桜に対する想いと、彼女の行動力を完全に甘く見ていた。

彼女はどうかしてる、私は何故それにもう少し早く気づかなかったのか。

この段階で気づけていたら取り返しがついたのでだろうな。

私は助かっていたのだろうな。

桜狂う季節

その夜、私はイリコと桜の木の前にいた。

たいていの学校は校門の開け閉めにはとても甘く、夜中でも誰でも入れるようになっていた。

この学校もその例外では無かった。

「こんな夜遅くに呼んでごめんね。

大切なものを埋めたかったんだけど、私一人じゃ穴を掘るのは難しくてさ…。」

彼女はそういうと私に大きなスコップを渡してきた。

そういえば、確かに彼女は身体の弱いほうだった。

それに比べて私は健康で運動も出来る方だ。それにしても…

「あんた…あの逸話信じてるの…あくまでも逸話だよ…。」

と穴を掘りながら言っていると彼女は笑顔で

「えへへ、試してみたくて…。」

と答えた。まあ、彼女はそういうのを信じやすい性格なのだ。

気が済むまで付き合ってやるしかない。

一人ぐらいいる大きな穴ができた頃、彼女が私に話しかけてきた。

「ねえ、なんで私のためにここまでしてくれるの？こんな身勝手な私のために。」

なぜだろうか、なんで私は彼女のためにここまで尽くしているのだ

ろうか。

そんなの考えなくても答えは出ている。

「それはね、友達だからだよ。」

「友達？こんな地味でつまらなくてひとりぼっちな私のことを？」

彼女の顔は見えなかったが声からして私のことを疑っている。

でも、私は素直な気持ちで答えた。

「そうだよ。最初は私もあんたが言っていたようにあんたのこと誤解してた。

でも実際話してみると、あんたは地味なんかじゃないし、とても面白い子だった。

そして、あんたのこの桜の木に対する想いを聞いて私は本当にあなたに協力したくなった。

だから、ひとりぼっちなんて言わないでよ。

私はいつまでもあんたが友達で、あんたが大切だよ。」

そう言い終わると急に恥ずかしくなってきた。何を言っているんだろう私。

上からすすり声が聞こえる。

あー、もう恥ずかしい、こんぐらいで感動するなよ。穴はもうとても深くなっていた。

「おい、そろそろいいだろ。私を引き上げてくれ。」

と上に呼びかけた。

「私もあなたのことが大切だよ。」

と上から声が聞こえた。

なんだよ、また話をぶり返す気かと私が思っていると上から土が落ちてきた。

顔面で受けてしまった私は目が開けられなくなってしまった。

「ちょっと気をつけてくれよ！目に砂が入ってしまったじゃない！」

そう上に返すと、上から返事が降ってきた。

『知ってる？桜についてのもう一つの逸話。』

返事と共に土も降ってくる。

どんどんどんどん降ってくる。私がいくら上に怒っても叫んでも彼女は続けた。

『桜の木の下に生者を埋めると』

土が脚に絡みつく、もう脚が動かせなくなっていた。

『魂を吸って綺麗な綺麗な花を咲かせるんですって。』

土が腰までに到達した。どうやら彼女は本気だ殺られる。

『そして、あなたが話してくれたあの逸話、大切な物を埋めると成長が早くなるって言うらしいじゃない。』

これはまずい。もう胸辺りまで土で浸かってしまっている。必死に登ろうとしても砂の壁は落ちてくる。必死に叫んでも誰も来ない。

『あなたは生者でわたしの大切なもの……桜の下に埋まるには適任だ
 と思わない?』

もう首まで漬かってしまった。

かろうじて目を開くと彼女の表情を見ることができた。彼女は笑っていた。

目も口元も心から笑っていた。心から邪惡な笑みで染まっていた。

「助けて……」

『わたしのために死ね』

やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやば
 やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやば
 いやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやば

[illegible]

やヴあ
i
a
s
⋮

そうして私は桜の肥料となった。

次の日、桜は狂ったように咲いていた。どの桜よりも美しくどの桜よりも輝いていた。

まるで人の魂でも吸った様に。

その年からその桜は春に咲かず秋に咲く『狂い桜』として伝説の一
つとなったのであった。

桜狂う季節（後書き）

はい、もしここまで読んでくれた人が居たら僕はこういいたいです。
『ありがとう』と。

さて、この話は120%趣味で書きました。
最後の部分だけを書きたかったために他の章を書いたと言っても過言ではないです。

気分を悪くなさった方は申し訳ございません。

さて、今回の小説のテーマは『冬』。

一応、狂い咲きなので…

あ、ちなみに前回の『蝉』はもちろん『夏』ですよ。

次は『秋』をテーマにしたいですね…

ではでは、つきあってくれたかた、本当にありがとうございました

よかったら、感想も書いてくださいね。

ではでは

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8659t/>

狂い桜

2011年6月7日14時17分発行